

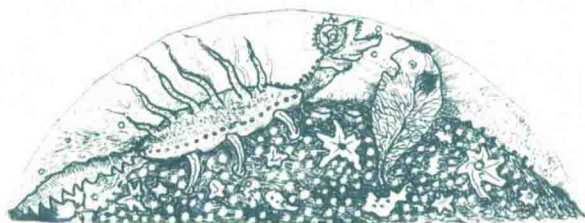
ホッパ―大佐対真夜中の滝

Colonel Hopper

VS

Fall in the middle of the night

鈴木有美子



ホッパ―大佐対真夜中の滝

Colonel Hopper

VS

Fall in the middle of the night

鈴木有美子

思潮社

ホッパ―大佐対真夜中の滝

著者

鈴木有美子

発行者

小田久郎

発行所

株式会社思潮社

〒一六二一〇八四二 東京都新宿区市谷砂土原町三―十五

電話〇三(三二六七) 八一五三(営業)・八一四一(編集)

FAX〇三(三二六七) 八一四二

印刷所

三報社印刷株式会社

製本所

小高製本工業株式会社

発行日

二〇一四年十一月二十五日

目次

いまは亡き片目猫のために 6

なみだ 11

家路 15

だらだら坂 18

黄色い家 23

無告 26

海行列車 32

ひとりの友と 38

都市の子 45

森、または深い夢の塔 50

隣家の物置の中には 54

六月の尼さん 59

こほろぎ嬢の滅亡 62

ホッパー大佐、夜に侵攻する 67

ホッパー大佐対真夜中の滝 73

夢の小箱 80

霧、または最後の塔 84

Drop of Dreams 90

あとかき 92

Colonel Hopper VS Fall in the middle of the night

目次

いまは亡き片目猫のために 6

なみだ 11

家路 15

だらだら坂 18

黄色い家 23

無告 26

海行列車 32

ひとりの友と 38

都市の子 45

森、または深い夢の塔 50

隣家の物置の中には 54

六月の尼さん 59

こほろぎ嬢の滅亡 62

ホッパー大佐、夜に侵攻する 67

ホッパー大佐対真夜中の滝 73

夢の小箱 80

霧、または最後の塔 84

Drop of Dreams 90

あとかき 92

装画 岩佐なを

ホッパ―大佐対真夜中の滝

鈴木有美子

いまは亡き片目猫のために

多分真夜中の河の底だ。あの、

いじらしくも穢^けらわしい

片目の猫が 走って消えていったのは。

(たいぶ以前から、

この街には、滅びを待つだけの魂だけが生き延びている。

(それはおそらくあなたがたのことだ。

そしてその脳のあわいでは、

夜毎、記憶を穿つための突貫工事が行われている。

今夜こそ

その音を止めてほしいのだ。消えた猫を

思い出させる忌まわしい音の洪水を。

わたしの周りでは

満天の星を孕んだように

血腥い夢の名残が塗りこめられている。

それはたぶん我々が

一本の葦などではなく（もちろん

ひとつの悪夢にも如かないことを確かめるため

そしてまた、あの

穢らわしい片目猫をついに失ったのだと

思い知らせるためだったのだろうか。

ふん。

性懲りもなく繰り返されるテーマパークの乗り物に
押し込められてしまった乗客だよ。確かにいまの我々は。でも、
どこにしようと、相変わらず

わたしが探しているのは片目猫だ。

あの、膿の溢れる眼窩と凍った舌を持つ澄んだ化け物。

ちようど この世界の反対側あたりの堤防を

どこまでもどこまでも駆け抜けることのできるような

目玉を失くしてしまった喪失者だ。

そうそう

そうだった。

だからむしろ

わたしたちが問わねばならなかったのは、

失われた目玉のほうだったのかもしれない。

世界はいつも

いまあるものたちよりも

失くしてしまったものの欠片の方で

ようやく その精緻さを保っているものなのだから。

そして 片目猫の方だって

失くした片っぱの目玉ゆえに片目猫であるのだし

その空洞こそが、自らをもう一つの世界につなげるものであったのだろうから、ね。

だからわたしは夢をみる。

確かにあの夜、

凄まじい哄笑とともに片目猫が消えて行ってしまったとしても

猫はまだ

世界を その仄暗い眼窩にくわえ込もうとして舌と爪を研いでいるのだし

潰れる直前の赤い目玉の方ときたら

いま、この瞬間にだって

海沿いの堤防を疾走しながら

跳び

うねり

狂おしく身悶えしては、ついにわたしの眼球へと至り

やがてそこから臨む世界そのものを

食い尽くしてしまおうとしているのだ。

明日こそは目覚めれば

枕元にはきつと あの片目猫が座っているに違いない。

禍々しく舌舐めずりをした後には

大欠伸をし

その奥に潜む暗い洞穴をこっそり見せてくれることだろう。

そして精緻過ぎる世界には冷笑と憐憫を与え

テーマパークの乗り物には一瞥もくれずに

ただ

鳴くためだけの鳴き声を

高々と、虚空に向けて放つだろう。

片目猫を失ってからずっと

わたしはそんな夢を

暗闇に目を凝らしてみているのだが。

なみだ

いつもその坂をのぼってくるひとがいる

きょう そのひとは

黒いコートと草臥れた帽子を年老いた身に纏い

天球型の教会に消えていった

坂の両端には

氷と泥の混ぜ物になってしまったような残雪が積まれ

この頃ではとんと見かけなくなった野良犬の

格好の遊び相手になっていた

（氷と泥の混ぜ物

老紳士が僕に残していったものはそれによく似たなみだであった

あるいはそれは僕にではなく

野良犬に与えられたものだったかもしれない

それとも 彼が吸い込まれていった教会の聖人に捧げられたか
そこで行われている葬儀のためのものであったのか
しかしいずれにしろ それを拾ったのは僕だった

僕はそれを拾い上げ

こっそりとポケットに隠し入れた

ポケットの中で次第に温まってくるなみだ それは
まるで世界を支えているかのようにさえ思われて

僕は恐れた

もしや彼がすぐに気付いて戻って来はしまいか
あるいはミサに参列するベールを被った娘らが

僕が持ち去ったことに感付いて重い扉から踊り出て来はしまいか

いやいや あの野良犬だとして浅ましい舌を垂らし
駆け戻ってくるかもしれないではないかと

草臥れたあの老人のなみだを求めて